アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

特集 進化するユネスコスクール……2
カンボジア識字教育事業 SMILE Asia プロジェクト……7
中国・韓国政府日本教職員招へいプログラム……8
第1回 全国高校教育模擬国連大会……9
法人維持会員訪問記……10
コラム「東奔西走」……11
活動メモ……11

No.403
2017年10月号

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

未来へつなげ! 進化するユネスコスクール

ACCU は、ユネスコスクール事務局として、1,000 校を超える国内のユネスコスクールの活動支援およびこれから加盟を希望する学校に対する支援を行っています。一口に「ユネスコスクール」と言っても、その活動分野は平和・環境・多文化共生／異文化理解など多岐にわたります。それでは、事務局に寄せられたいくつかのユネスコスクールのユニークで熱意ある取組みをご紹介しましょう！ 教室内にとどまらない、周囲を巻き込んだ“ユネスコスクールらしい”活動ばかりです。

文化学園長野中学・高等学校

多文化共生／異文化理解・地域との連携

本校には「異文化理解・ボランティア教育プロジェクト」として、10 年以上毎年続けている活動があります。それは、長野オリンピック記念長野マラソン招待外国人選手との一校一国交流会をはじめ、長野マラソン、長野車いすマラソン当日の選手アテンドや、大会補助員として、ほぼ全校の生徒がボランティア活動をしていることです。車いすマラソンの力強さに圧倒され、その生き様に涙する生徒もいました。

昨年はエリトリア、今年はウガンダの選手を迎え交流会をしました。その中で、弓道の素引きを披露した際、ご自身の幼少期を思い出され、通学途中、手作りの弓矢で遭遇した猛獣と戦った話をしてくださいました。アフリカのサバンナに思いを馳せる貴重な経験になるとともに、弓を通して、日本とアフリカの文化・生活の違いにも目を向ける機会となりました。

北海道礼文高等学校

生物多様性・地域との連携

礼文島では国内では珍しい周氷河地形が見られ、低地でありながら絶滅危惧種に指定されている高山植物が多く観察できます。学校教育の中で、自然を守りながら経済を発展させるという持続可能な開発のための教育（ESD）の考えの下、ふるさとの価値を理解し、地域の活性化に寄与する人材の育成に努めています。

活動の１つであるボランティアガイドでは、生徒が授業で学んだ植物を説明しながらガイドを行うとともに、事前学習としてボランティア活動の意義・目的を学び、コースの下見を行ってガイドのプランニングも行いました。また、礼文町高山植物培養センターの協力を得て、絶滅危惧種であるレブンアツモリソウの培養について実習を行っています。3 年前に生徒が植え継いだプロトコームが株まで成長しています。

年度当初は高山植物の名前もわからなかった生徒たちが、授業・実習を受けていく中で改めて自分の生まれ育った地域を知ろうとする姿勢を持つようになったと感じます。

認定は

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実現する学校の世界的なネットワークとして、ユネスコ本部が認定するものです。ユネスコの理念に沿った継続的な取組みが認められれば、校種や運営母体を問わず門戸が開かれています。

世界で

1953年に33校からスタートしたこの事業は、現在、世界180以上の国・地域で1万校以上にまで発展しました。このうち、日本国内の加盟校数は1037校で、世界最多となっています（2017年8月時点）。

日本で

2008年に文部科学省がユネスコスクールをESD*1の推進拠点として位置付けたことで、日本の加盟校が急激に増加し、世界で存在感を増しています。

大牟田市立中友小学校

福祉・地域との連携

本校は、少子高齢化という地域課題や大牟田市教育委員会が推進している ESD の一環として福祉教育に重点化を図っています。

その具体的な取組みとして５年生において、民生委員活動を地域の一員として共に体験し、教育活動に生かす「子ども民生委員活動」を８年前から続けています。人と人とがつながりを持って生活している地域を大切にすることができる思いやりのある子どもを育成することをねらいに、「総合的な学習の時間」の中で学習を進めています。主な活動としては、子ども民生委員委嘱状交付式、独居高齢者宅訪問、認知症学習、徘徊 SOS 模擬訓練、街頭募金活動、敬老会の準備と参加、校区餅つき大会、学習発表会などです。今年度は、新たに７月に「寄付の教室」を日本ファンドレイジング協会の協力のもと開催し、寄付の模擬体験を行ったところです。

このような取組みを通じて、他者との関係や地域とのつながりが深まり共生社会の素地を養うとともに、高齢者や地域への理解がさらに深まることを期待しています。

兵庫県立北須磨高等学校

平和・環境

太平洋戦争犠牲者と同数を米博物館へ

折り鶴350万羽協力を

被爆者数の呼び掛けに 北須磨高生が呼応

17日の文化祭 製作呼び掛け

5月にユネスコスクール公式 WEB サイトに「祈りづるプロジェクト*2」への協力を依頼したところ、多数のユネスコスクールが参加してくれました。本校は６月の文化祭で実施しましたが、在校生と来校者だけでなく近隣の老人会の方々や特別支援学校の生徒さんも協力してくれて、参加者から「微力ながらお役に立てて嬉しいです」という言葉をいただきました。このイベントで中心になって活動した生徒は、現在、官民協同海外留学制度「トビタテ留学 JAPAN」に選ばれ、タンザニアで平和のためのボランティアをしています。

また、６月には、同じくユネスコスクールである福島県立安達高等学校を訪問して、両校の生徒で原発被災地を巡検し、放射線測定も実施し意見交換しました。7 月にはスカイプ会議を実施し、「福島県産の農作物を食べるかどうか」、「原発避難者へのいじめ問題」等、復興について本音で議論しました。

＊1 Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育
＊2 祈りづるプロジェクト：アメリカ・ユタ州の博物館に「サダコ（原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さん）の鶴」を寄贈する際に、350 万羽の祈り鶴を合わせて寄贈するプロジェクト

パートナー ASPUniv Netの可能性

ASPUnivNet（エーエスピーユニブネット）*とは、ユネスコスクールのパートナーとして、ユネスコスクールの活動を支援する大学のネットワークです。高等教育機関ならではの専門的、学際的な知見を活かし、加盟申請中から加盟後まで様々な段階に応じた実践のアドバイスやユネスコスクール向けの研修会の実施など、幅広く支援を行っています。２０１７年８月現在、全国で20大学が加盟しています。ＡＣＣＵは、ユネスコスクール事務局の運営と同時にASPUnivNet事務局も運営しており、ユネスコスクールとASPUnivNetをつなぐ重要な役割を果たしています。今回、ASPUnivNet加盟大学のお二人の先生にインタビューをしました。

石丸哲史 氏
福岡教育大学教授

市瀬智紀 氏
宮城教育大学教授

――市瀬先生はASPUnivNetの設立当初から携わられていると伺っていますが、設立の経緯について教えてください。

市瀬　２００７年に本学で開催したシンポジウムの中で当時20校程度に過ぎなかったユネスコスクールの加盟校増加に取り組み、そのネットワークを活用してＥＳＤを推進していくという方針が文部科学省より明示されました。

それに対して本学は、高等教育機関がネットワークを組織してユネスコスクールを推進しその活動を支援すれば非常に良い貢献になると考え、当時、ＥＳＤやユネスコスクール活動に先進的に取り組んでいる８大学の賛同を得て、ASPUnivNetの設立を提案し、２００８年12月に正式に発足しました。

――石丸先生は確か２０１４年頃ASPUnivNetへの加盟に向けてご準備されていましたが、きっかけを教えてください。

石丸　本学が加盟する前、九州地方ではいくつかの大学がASPUnivNetに加盟されていましたが、不幸なことにこれらの大学が脱退され、九州地方には一つも加盟大学がない状況になりました。このような中、ユネスコスクール加盟に積極的に取り組んでおられた大牟田市教育委員会をはじめ、ご縁のある学内外各方面から要請があり、その期待に応えるべく加盟することになりました。

――それぞれの大学で、ASPUnivNetとしてどのような活動をしていらっしゃいますか？

市瀬　ユネスコスクール加盟申請時、そして加盟後の学校を支援するのが、創設以来の仕事になっています。加盟希望校があれば、実際の活動内容を検討して申請のお手伝いをします。特に、うちの地域では市町村単位で加盟申請するケースが多く、そのような市町村の話を聞き、教員を集めた会議・研修会を開催するのが一番の教育的支援になります。東北地方の自然環境を生かした環境教育や２０１１年の東日本大震災を踏まえた防災教育などが地域のユネスコスクール活動・ＥＳＤの特徴になっています。

２０１０年からはユネスコスクールの地域大会である宮城県大会・東北大会を開催し、学校だけでなく東北地方の様々なステークホルダーと連携が進んでいます。

石丸　福岡教育大学でも、ユネスコスクール加盟申請の支援をしています。現場目線を怠ることなく、申請校の特徴や状況を細かく把握し、各学校にあった活動を提案しています。本学にはユネスコスクール支援・ＥＳＤ推進チームがあり、メンバーのコメントを集約し申請書に対する客観的な意見にまとめています。

また、ＥＳＤを実践されている学校の支援をしています。校内研修会や研究発表会などでの指導・助言です。教員免許状更新講習の中にもＥＳＤの科目を開設するなど、ユネスコスクール以外の学校や先生方も含めた広い意味での支援活動も進めています。

――ユネスコスクールを支援する上で難しさを感じることはありますか？

市瀬　東北地方にはユネスコスクールが現状で88校あり、それぞれの学校に顔を出したいと考えています。やはり日常的なコミュニケーションが活動の推進につながっている訳ですが、いくら頑張っても全ては回りきれません。マンパワー不足というか、丁寧に対応するという点で難しさを感じています。

石丸　市瀬先生がおっしゃったとおりで、現場目線を標榜しているのに、現場に行けていないのです。研修会に伺う機会は多くありますが、やはり各々が個性を持った学校なので、学校の事情に応じた支援をどう進めるかということが一番のポイントです。

また、各学校には学習指導要領に基づいた教育課程や年間指導計画などしっかりした枠組みがあるため、この枠組みを壊すことなくいかにＥＳＤを深化・拡充していくか、難しい大きな課題です。ただ、これらのこととＥＳＤは相反するものではなく、win-winの関係を築けると思います。ＥＳＤの視点を導入することによって授業が主体的・対話的で深い学びになったとするならば、これから求められる教育にユネスコスクールが貢献できるわけです。

――これからのASPUnivNetをどのようにしていきたいですか？

石丸　各大学の特色あるユネスコスクール支援の実績を前面に押し出したいですが、一方で大学間ネットワークとしての役割も果たしたいですね。ASPUnivNetにしかできないことを追求しています。

市瀬　成立から10年近くなりますが、ASPUnivNetは、数でも質でも発展してきたと思います。単なる加盟申請支援から各種の事業を展開してきました。一方で、私たちASPUnivNet大学自身が、例えばＥＳＤの研究や大学内でのＥＳＤのカリキュラムの推進を図っていく必要があると思います。大学内におけるＥＳＤの展開は、ASPUnivNet設立の目的としては明確に記載されておらず、まだまだこれからの部分です。

――ユネスコスクールに向けてメッセージをお願いします。

石丸　今の学校は、学力向上、体力向上……など多くのミッションを抱えています。ミッションの重みに押しつぶされそうな学校も見られます。このような中で、ユネスコスクールはビジョンも持っています。ユネスコと共有する、持続可能性に向かったビジョンともいえるでしょう。これは先ほどのミッションと矛盾することはなく、学校、児童・生徒、保護者、地域住民が共有できるものです。「自信をもってください！」これが私のユネスコスクールへのメッセージです。

市瀬　ユネスコスクールは、１９５３年から今日まで続く世界的なスクールネットワークです。また、ＥＳＤは、持続可能でなくなった社会の矛盾や困難に向き合い、未来を創造していく取組みです。その意味でいえば、ユネスコスクールは、終わりなきチャレンジを続けていく学校であるといえましょう。次期学習指導要領の前文に示されたこれからの教育のあり方を、ＥＳＤの文脈に照らし合わせると、すべて読み解くことができます。ＥＳＤが取り組んできたことを学習指導要領が追いかけているともいえます。新しい教育の方向性を担うユネスコスクールとＥＳＤの取組みに、今後も期待しています。

ASPUnivNetのように、高等教育機関がネットワークを形成してユネスコスクールを支援する仕組みは、世界的に見ても日本にしかないと言われており、ユネスコ本部をはじめ世界から注目されています。ＡＣＣＵも、ASPUnivNet事務局として加盟大学の活動を支え、より充実した支援を行えるよう貢献していきたいと思います。

＊ ASPUnivNet：ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

2017年6月、ブラジルからユネスコスクールの教職員46名が訪日し、東京近郊のユネスコスクールを中心に交流事業を実施しました。本プログラムは、ブラジルのユネスコスクールネットワークがほぼ毎年主催している国際交流事業の一環で、2012年の開始以来、アジアでは日本が初めての訪問先となりました。

教育協力部　若山 洋子

千葉県立下総高校にて生徒から風力発電研究の説明を受ける様子

交流 ブラジルから先生方を迎えて

6月12日のプログラム初日は、文部科学省を表敬訪問し、日本の教育制度全般とユネスコスクールについての講義を受けるところからスタート。全3日間の行程で、就学前教育から総合専門高等学校まで、校種も多岐にわたる5校を訪ねました。訪問する先々で、地球の反対側からはるばるやってきた「お客さん」を温かく迎え入れてくれる児童生徒の皆さん、様々な企画をご準備頂いた先生方の熱意が伝わり、今回コーディネーターとして企画・運営を担当したACCU職員一同、幾度となく胸が熱くなる瞬間がありました。

ブラジルの参加者からは、「日本の教育の質の高さはブラジルでも知られているが、ここまで素晴らしいとは想像していなかった」「日本の子どもたちは多くのプレッシャーの中で学んでいると思っていたが、非常に愛に溢れ、活き活きとしている様子に感銘を受けた」などの声が聞かれました。また、学校運営についても、「（給食の配膳や授業準備など）児童生徒の学びにつながる活動が随所にちりばめられていた」「地域との関わりが非常に活発かつ主体的であった」など、現場の先生方ならではの視点から、様々な気づきがあったようです。

日本とブラジルは、ユネスコスクール加盟校数において、共に世界第一位、第二位を誇ります。*また、昨年からは、ユネスコ本部主導のユネスコスクール旗艦事業「気候変動をテーマにした機関包括型アプローチ実践プロジェクト」に両国とも参加しており、学校レベルの交流促進はもちろん、国のネットワークレベルでも、これまで以上に活発な情報交換が期待されます。最後に、今回の交流プログラムが、受け入れにご協力頂いた学校の児童生徒、そして先生方にとって、遥か海の向こうにいる「同志」をより身近に感じ、共に生きる地球市民としての意識が芽生えるきっかけとなってくれれば大変嬉しいです。

DATA

訪問日程

6／12　文部科学省、千葉県立下総高等学校

6／13　杉並区立西田小学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校

6／14　ふじ幼稚園、東京賢治シュタイナー学校

情報

ユネスコスクールについてもっと知りたい方は……

「ユネスコスクール公式ウェブサイト」（http://www.unesco-school.mext.go.jp/）をぜひご覧ください。

加盟申請方法については、メニュー「加盟申請を希望される方へ」にてご案内しています。
お電話でのお問い合わせは ACCU 内ユネスコスクール事務局（03-3269-4559）へ。

事務局メンバー

＊日本では1,037校（2017年8月現在）、ブラジルでは374校（ブラジル ASPnet訪問団資料より）が加盟。

ACCU Programme

カンボジア識字教育事業

識字を通じて自分らしく笑顔で

ACCUは2007年よりSMILE Asiaプロジェクト*を実施しています。今年度は、カンボジアのコンポンスプー州の5つの村で、子どものケアをする成人女性を対象に識字教室を開講。6月に現地を訪れ、プロジェクトの方向性や各関係者の役割、現地の人々のニーズ等について話し合いました。

教育協力部　四方 八重戸

本年度識字教室に参加する妊婦さんと子ども

当事者意識を高めて取組む

プロジェクト関係者との会合で、プロジェクトの目標や方向性について、共通理解を深めました。さらに、各関係者から自らの役割を明言してもらうことで、本プロジェクトを成功させるための言質を引き出し、当事者意識を高めることができました。また、現地実施団体であるカンボジア女性開発機関（CWDA）との協議で、生活向上の知識や技術に関する教員用指導教材の需要が高いことが判明し、作成に向けて準備を進めることで合意しました。カンボジア教育省ノンフォーマル教育局からは、識字教室の教員の給与についての財政支援、教員への技術支援など、新たな協力を得ることができました。

インタビューから見える現実と今後

プロジェクトを実施している村では、村長、教員、学習者にインタビューを行い、カンボジアの内戦の歴史が今でも教育に大きな影を落としていることを実感しました。例えば、村の中で比較的教育を受けている人々が教員として選ばれていますが、彼女たちは小学校も卒業していません。内戦で公的な教育が受けられない環境にあり、疎開した先々で隠れて勉強をしていたとのお話を伺いました。一方で、読み書きができることで彼女たちの生活の質の向上や、家庭や子どもの教育環境の改善が大きく見込める点についても改めて感じました。

昨年度の学習者からは、「以前はペンを持つことでさえ、緊張して手が震えていたが、今では自信を持って字を書くことができるようになった」「読み書き計算ができるようになって、家計の支出が少なくなった」という声を聞くことができました。これから参加する学習者からは、「子どもの学習をフォローできるようになりたい」「物を売りにいったときに、おつりをだまされないようになりたい」「道路標識が読めるようになって、村の外に出かけることができるようになりたい」「家族の健康に関する情報を得て、家事に活かしたい」などの希望を知ることができました。

ACCUは、今後も現地の関係者と協力をして、プロジェクトを通して多様なスキル（識字力、保健衛生に関する知識・技能、生活向上に関する技術）を取得した女性が「自分らしく笑顔（SMILE）で」人生を送ることができるよう支援していきたいと思います。

＊ Supporting Maternal and Child Health Improvement and Building Literate Environment（SMILE）　母子保健教育をテーマとして識字環境の推進をめざすプロジェクト。凸版印刷株式会社様、株式会社中ノ口製作所様、小石川ロータリークラブ様はじめ法人、個人の方のご寄附を受けて実施しています。

ACCU Programme

中国政府日本教職員招へいプログラム

個性を伸ばす教育 ―中国の学校現場にて

人物交流部　有薗 佳子

今回は中国教育部や安徽省教育庁のほか、各地で6つの学校を訪問しました。学校訪問を通して最も感じることは、児童生徒の個性を伸ばす教育が行われているということです。中国の学校では、私たち訪問団に子どもたちが歌や踊りを披露してくれることがありますが、それがクラスや学年全員で行われることはなく、得意とする子どもが児童生徒を代表して披露します。また、これまで訪問した学校には、必ず優秀な児童生徒を写真付きで紹介する掲示板があり、学習面で秀でた児童生徒が称えられていることもわかります。

中国の教員に理由を尋ねると、中国は人口が多く競争社会であり、各々の得意分野を伸ばしていく必要があるため、積極的にこのような機会を子どもたちに与えているそうです。確かにそれらの子どもの顔は自信に満ち、その堂々たる姿に大人の私でも圧倒される程です。学校が実施するクラブ活動に加入する際は、選考があることもあり、小さな頃から競争社会で生きる中国の子どもたちの一端を垣間見ることができました。

生徒のピアノ独奏に聞き入る日本教職員（安徽省の合肥特殊教育センター）

DATA
プログラム名：国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業　中国政府日本教職員招へいプログラム
実施期間：2017年5月16日（火）～23日（火）
参加人数：25名
訪問地：北京市・安徽省・上海市

韓国政府日本教職員招へいプログラム

日本教職員、韓国で「センセイ」に挑む！

人物交流部　河口 枝里子

7月12日、日本教職員は、ソウルの学校で「ねぶた祭り」「よさこい」など地域の祭りや、「折り紙」「紙相撲」といった日本の文化や遊びについて、子どもたちに実際に体験してもらう授業を展開しました。1か月前から準備を始めた日本の先生たちですが、教室に入るときは、緊張感が漂っていました。しかし、ある教室で「センセイ！」と日本語で呼ばれた瞬間に空気が和らぎました。担当した教員は、心があたたまる瞬間と通じ合える喜びが何度もあったと語っていました。ときには、準備した韓国語が間違っていると、笑顔で直してくれる子どもたちがいて、緊張もほぐれた様子でした。

「まずは一緒に」「よさこいは世界平和の第一歩」「あったかい」「日韓の国境を越える架け橋に」これらは、授業を担当した日本教職員たちが一言で表した感想です。国も言葉も、文化も違いますが、お互いを知ろうとする気持ちを大切に、韓国での「センセイ」としての経験を生かしてもらいたいと思います。

善一女子中学校でよさこいの授業をする日本教職員

DATA
プログラム名：国際連合大学2016－2017年国際教育交流事業　韓国政府日本教職員招へいプログラム
実施期間：2017年7月11日（火）～17日（月）
参加人数：49名
訪問地：ソウル・中部の忠清北道（チュンチョンプクト）と中東部の大邱（テグ）広域市・仁川（インチョン）

第1回全国高校教育模擬国連大会

入門型大会、満員御礼で初開催！

8月7日、8日の2日間、全国高校教育模擬国連大会の記念すべき第1回目を開催しました。この大会は、模擬国連活動の教育的価値を更に高校生に広めたいという趣旨のもと、日本語による入門型の大会として開催しました。

模擬国連推進部　青木 文

大ホールで進行する会議風景（国立オリンピック青少年記念センター）

挑戦者たちの暑い熱い東京の夏

毎年11月に選抜形式で行なっている全日本高校模擬国連大会*やその他各地で開催されている会議は、そのほとんどが英語によるもので、初めて取り組む高校生にとってはハードルが高いという声もあり、少しでも初心者が取りかかりやすいよう、今大会は議長の定型句以外は全ての会議部分を日本語で行いました。また、事前にホームページで模擬国連のルールの紹介動画を作成して流すなどの工夫も凝らしました。その甲斐あってか、初参加の生徒たちも皆、途中であきらめることなく最後まで必死に議論に取り組んでいる様子が見受けられました。

今年の議題は「核軍縮」。緊張感を漂わせる各国のニュースが流れる昨今であり、また8月という、一年で最もこのテーマについて思い巡らす時期に適った議題となりました。4つの議場に約60か国ずつの大使たちが割り振られ、事前に調べた担当国の立場や諸外国との関係性を吟味しながら、グループ作りや交渉を行い、決議案をまとめていきました。会議中は、専門用語が飛び交い、入門型とは思えないような高校生の実力の高さに眼を見張るばかりでした。

高校生の高校生による高校生のための大会

本大会は、実行委員も高校生で構成され、日本各地に散らばる44名の高校生実行委員と顧問教員が大会直前までメールなどを駆使して準備を進め、大会前日にようやく初めて全員が顔を合わせるという、一歩先を行く働き方を実践したというのも特徴的でした。事前の広報活動や当日の受付対応、また各議場における議長や会議監督も全て高校生が行いましたが、一致団結して作業をする姿や、参加120人を超える議場を堂々とコントロールする真剣な眼差しを見ると、彼らのこれからの可能性に期待が膨らみます。

参加した高校生の話を聞いたところ、初めてで戸惑う場面はありながらも、他の大使らと交渉をしながら関係性を深めていく醍醐味を味わっているようでした。この大会で経験を積んだ高校生が、今後開催される全日本高校模擬国連大会にも挑戦をつなげられるようにと願っています。

DATA
主催：ACCU、全国中高教育模擬国連研究会（全模研）
実施期間：8月7日（月）～8日（火）
開催場所：国立オリンピック青少年記念センター
参加者：全国68校から高校生398名、中学生（トライアル）73名、引率教員約70名、見学者約100名

＊本年は11月11日（土）、12日（日）に国連大学にて第11回大会を開催予定

Pick up Information

インドネシア視察団が ACCU を訪問

7 月 25 日（火）、インドネシアよりノンフォーマル教育、中でもコミュニティ学習センター*を中心に活動されている 21 名が ACCU を訪問されました。行政担当者や教員に加えて料理、ファッション、車両関係等生活に身近なノンフォーマル教育の様々な分野で教育省の表彰を受けた方が含まれた多彩な顔ぶれで、日本の公民館との交流を目的に来日されました。

午前中は ACCU 職員と現在の活動を共有し合い、午後は「インドネシア／日本　学びの交流カフェ」と題して一般の方も参加するイベントを開催しました。

イベントの前半は、シニアアドバイザー柴尾智子を語り部として ACCU のノンフォーマル教育支援活動を知る時間。1993 年制作の識字教材「ミナの笑顔」ほか、支援先の人々の笑顔を想像しながら、教材を一つ一つ作っていた過程は、現在の ACCU の活動の礎であることが紹介されました。

後半「コミュニティの中の学び」では、参加者同士が積極的に意見交換。インドネシアでは、ノンフォーマル教育分野の予算が手薄な中でも教員の待遇改善の傾向があること、自己啓発を促す内容で全国的に活発な教育活動を行っていることなど、対話した職員は強い印象をもったようです。参加者から「学び」は子どもたちのためだけではなくみんなのためにあると声があがり、学び続ける思いを共有できた貴重な機会でした。

（教育協力部　篠田 真穂）

＊ Community Learning Centre（CLC）日本の公民館に近い存在。学校とは別の、地域の誰もが参加できる「学び」の場

第4回

法人維持会員訪問記 凸版印刷

次世代につなぐ、印刷の力

お話を伺った方：山本 正己氏（広報本部CSR推進室室長）

維持会員としてはもちろん、毎年のチャリティーコンサート開催により ACCU の識字教育事業をご支援くださっている凸版印刷株式会社様を訪問しました。近代日本の繁栄を支えた教育も印刷の力で支えられていたというお話もあり、多方面にわたる多彩な社会貢献活動の中から印刷博物館（東京都文京区水道 1-3-3）についてご紹介いただきました。

印刷の過去、現在、未来をわかりやすく伝える「印刷博物館」は、1900 年の創業以来、常に情報・文化の担い手としてその事業を進めてこられた凸版印刷の 100 周年記念事業として 2000 年に創設されました。印刷の役割と意義を広く公開し、その広がりと可能性を提案し、印刷表現技術の重要性を次世代に伝承すること、印刷文化学を確立することを目指されています。

本展示場のほか、活版印刷体験ができる「印刷工房」、3 台のプロジェクタからカーブスクリーンに投影される VR シアターなどが備えられ、2016 年 9 月には開館からの入場者数が 50 万人を超えたとのことです。

この印刷博物館で、2017 年 10 月 21 日（土）より「キンダーブックの 90 年－童画と童謡でたどる子どもたちの世界－」展が開催されます。キンダーブックは、凸版印刷の関係会社である株式会社フレーベル館が出版する幼児用絵雑誌で、明治期以後発展していった幼稚園の現場において、幼児教育を支える教材として大きな役割を果たしてこられました。このキンダーブックの変遷を通じてその時代の世相を読み解くという企画展で、図書開発事業を行ってきた ACCU としてもぜひ応援したい展示会です。どうぞ会場に足をお運びください。

（総務部　土井 みどり）

TOPPAN

ACCU 活動メモ 2017年5月～8月

①実施期間　②主催、共催団体名　③開催場所　④参加国、参加者数

高校模擬国連国際大会派遣

詳細…402号P9
①5月9日（火）～15日（月）　②ACCU、グローバル・クラスルーム日本委員会　③米国ニューヨーク国連本会議場およびグランドハイアットNY　④世界30都市から約1600名

ASP Univnet 第1回運営委員会

ユネスコスクール加盟校ならびに検討校を支援する大学のネットワーク（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）の第1回連絡会議の議題について協議。
①5月12日（金）　②ACCU　③日本出版会館　④10名

中国政府日本教職員招へいプログラム

詳細…P8
①5月16日（火）～23日（火）　②国際連合大学、中国教育部、ACCU　③中国（北京市、安徽省、上海市）　④25名

平成29年度日本／ユネスコ パートナーシップ事業推進委員会

平成29年度のユネスコスクール等支援事業（文部科学省委託）について、外部有識者からなる事業推進委員と委託元文部科学省職員とで確認、打合せを実施。
①5月27日（土）　②ACCU　③日本出版会館　④13名

ASPUnivNet　第1回連絡会議

昨年度の活動の評価と今年度の取組みについて協議。
①6月4日（日）　②ACCU　③日本出版会館　④38名

日本／ブラジルASPnet 教育交流プログラム

詳細…P6
①6月12日（月）～14日（水）　②ブラジルユネスコスクールネットワーク、ACCU（協力）③文部科学省、杉並区区立西田小学校、ふじ幼稚園ほか　④訪日団46名

◆高校模擬国連　派遣報告会

5月に米国で開催された「高校模擬国連国際大会」に日本代表団として参加した6校12名の高校生による報告会。
①6月24日（土）　②グローバル・クラスルーム日本委員会、ACCU　③日本出版会館　④約100名

韓国政府日本教職員招へいプログラム

詳細…P8
①7月12日（火）～17日（月）　②国際連合大学、韓国ユネスコ国内委員会、ACCU　③韓国（ソウル、忠清北道、大邱広域市、仁川）　④49名

SMILE Asia プロジェクト現地視察

詳細…P7
①6月19日（日）～24日（土）　②ACCU　③カンボジア王国（プノンペン、コンポンスプー州）　④2名

ESD重点校形成事業 ～輝け!サステイナブルスクール～

サステイナブルスクール24校の関係者を対象に、「持続可能な学校文化」についての理解を深める研修会を実施。
①7月23日（日）　②文部科学省、ACCU　③日本出版会館　④約60名

インドネシア訪日研修団受入

詳細…P10
①7月25日（火）　②ACCU（後援：ESD活動支援センター）　③日本出版会館　④訪日団21名、その他参加者14名

第1回全国高校教育模擬国連大会

詳細…P9
①8月7日（月）～8日（火）　②全国中高模擬国連研究会（全模研）、ACCU　③国立オリンピック記念青少年総合センター（代々木）　④参加者、見学者計約700名

第2回日タイ高校生科学技術交流プログラム（日本・アジア青少年サイエンス交流事業 さくらサイエンスプラン）

① 8月25日（金）～9月1日（金）　②ACCU（JST支援）　③名古屋市、東京都、つくば市　④訪日団16名

奈良　世界遺産教室

奈良県内の高校生に、文化遺産保護の重要性を楽しく学んでもらう出前授業。
i. ①5月30日（火）　③奈良市立一条高校　④40名
ii. ①6月13日（火）　③奈良県立朱雀高校　④37名

アジア東奔西走 第13回

Let's say "Chop-Chop!"

ユネスコ・アジア文化センター 人物交流部
高松 彩乃

提供：UNESCO APCEIU

「Chop-Chop!」これは何語で、何を意味しているのでしょうか？

正解は、シングリッシュ（シンガポール・イングリッシュ）で、「急いで、早く！」。7 月に韓国で開催された「17th Asia-Pacific Training Workshop on EIU*1」での、いちばんの流行語でした。

ACCU とは長く協力関係にある「APCEIU*2」が主催したこのワークショップには、実に 21 カ国から 28 名の参加者が集い、筆者も日本からの参加者として多くを学びました。9 日間にわたるワークショップのある夜、それぞれの国や地域の文化を紹介しあう「Cultural Night」が催されました。皆が民族衣装に身を包む中、シンガポールからの参加者が「シンガポールには色々な文化があるけれども、これといった衣装もなく、何を紹介すればいいのか迷った」と話してくれました。そんな彼女たちが選んだ題材が「シングリッシュ」。本人たちの心配をよそに場は大いに盛り上がり、とくに使い勝手のいい「Chop-Chop」は皆が使う流行語となりました。

ちなみに筆者は浴衣姿で、手作りの「花ふきん」と「水引」を紹介しました。花ふきんのうち一枚は、フィジーからの参加者の奥様へのプレゼントとして南へと旅立っていきました。

＊1 EIU : Education for International Understanding 第17回国際理解教育のためのワークショップ
＊2 APCEIU : Asia-Pacific Centre of Education for International Understanding 韓国にある UNESCO のカテゴリー2センター